

寒川町立旭小学校

研究テーマ：主体的・協働的に学ぶ子どもの育成～ICTを活用して～

1 実践の目的

昨年度は児童の実態から、育てたい要素として「主体性」と「協働性」をキーワードに掲げ、その力を育成するうえでICTの活用が効果的であると考え、研究テーマを「主体的・協働的に学ぶ子どもの育成～ICTを活用して～」と設定し、研究を進めてきた。

今年度は、ICT活用を前提としながら、どのような児童を育てていくかをさらに協議した結果、引き続き「主体的で協働的に学ぶ子どもの育成」を目指す研究を継続することとした。その中で、教科を国語と算数に絞り取り組んで研究を進めるとともに、学習場面に応じた有効なICT活用方法を検討・検証し、教師自身のファシリテート力の向上を図ることとした。

2 実践の内容

(1) 校内研究の体制

各学期に2学年ずつ研究授業を実施し、年間を通して全学年が1回ずつ研究授業を行った。指導案検討は低学年部・高学年部に分かれて行い、学年の実態に応じた協議を進めた。1学期は校内で自主的に研究を行い、2学期以降は外部講師を招いて指導・助言を受けながら研究を深めた。

(2) 研究授業

1. 1学期

【3年算数科「あまりのあるわり算」】

「割り切れない場合にどのように考えればよいか」をテーマに学習を



進めた。紙媒体で対象物を分けて貼り、自分の考えを書き出した後、学習支援アプリを使って他者の考えに触れ、考えを深めた。

【4年算数科「概数」】

学習支援アプリケーションを活用し、野菜の買い物を題材におおよその数で計算する学習を行った。最後に学習支援アプリケーションで考えを共有し、他者の視点に触れることで理解を広げた。

2. 2学期

【2年算数科「かけ算九九づくり」】

ものの数を分ける場面で、かけ算九九を活用して分割や移動の工夫を考える学習を行った。ワークシートに図・式・言葉で表現し、最後に学習支援アプリケーションで提出・共有することで、考えを比較しながら理解を深めた。

【6年算数科「並べ方と組み合わせ」】

問題文の条件を正確に読み取り、日常生活の場面に置き換えて組み合わせを筋道立てて考える学習を行った。



学習支援アプリケーションで考えを整理した後、グループ活動で共有し、互いの考えをもとに思考を深めた。

【研究協議・評価】

【2年】

今回の学習は、一つのかけ算だけでは解決できない問題であり、「分ける・かす・引く」などの操作を通して、まとまりの数で考えるとかけ算が使えるというねらいを明確にする必要があった。かけ算は「一つ分 × いくつ分」を一度だけ数える計算であることを押さえることが重要である。児童同士の対話を深めるためには、「どうやったんだろう」と他者の考えを読み取る場面を意図的に設定することが効果的である。

- 誘導して仲間分けをさせる場合、「どういうふうに分けたと思う？」など、視点を絞る発問が有効である。
- 自由に仲間分けをさせる場合、複数の方法を試す時間を十分に確保する必要がある。

協働的な学びを成立させるには、児童が実際に複数の方法を試し、比較できる時間が不可欠である。

【6年】

算数の問題解決学習では、「自分のこと」ではなく「誰かのため」という設定にすると、児童がより慎重に考える傾向がある。また、グループ活動では多様な意見を直接聞くことができ、児童がどこでつまづいているかを把握しやすいという利点がある。個人差が大きい場合は、グループ活動を「悩みの吸い上げ」の場として活用することが有効である。

うまくいかないことが明確になることは、思考が絞り込まれている証拠であり、肯定的に捉えることができる。導入段階で全員に考えさせることで、アイデアを焦点化する方向へ導くことができる。

3. 3 学期

1年算数科「大きなかず」、5年算数科「四角形や三角形の面積」、たけのこ級「重さ」「かたちづくり」において研究授業、研究協議を行った。

(3) 校内研修会

横浜国立大学の池田敏和先生を講師に迎え、講演会を実施した。

【講演内容の要点】

現代は先の見通しが立てにくい社会であり、児童にどのような力を育成すべきかを改めて考える必要がある。世界的には、学歴や職歴ではなく、個人がもつ具体的なスキルや能力を基準に評価する「スキルベース」の考え方が重視されつつある。そのために重要なのは、児童が「小さな失敗」を積み重ね、その失敗を次の一歩につなげる経験を積むことである。算数教育においても、単に計算を行うのではなく、日常生活の中に算数的な考え方を位置付け、生活に役立つ理由を明確にすることが求められる。



3 実践の成果と課題

昨年度より多様な学習場面で ICT を活用した結果、児童が主体的に学習に取り組む姿が顕著に増加した。また、教師による ICT の効果的な授業への導入も進展が見られた。一方で、授業の展開においては、児童の思考を焦点化するために「どのように考えたのか」といった発問を意図的に設定する必要性があることが明らかとなった。

さらに、グループ活動については、単なる発表の手段ではなく、互いの課題や疑

問を共有する場、または「どのように取り組んだのか」を読み解く場として位置付けることが、児童間の対話を深化させる上で有効であることが確認された。加えて、教師は児童のつぶやきを丁寧に受け止め、それを問いにつなげるファシリテーターとしての役割が求められること、そのファシリテーションの違いによって児童の思考の広がり方に違いが生じることも明らかになった。

児童向けのアンケートを実施し、4月でも2月でも、「先生は、あなたのよいところをみとめてくれていると思いますか」の項目で約9割が「思う」または「どちらかといえば思う」という回答をした。教師からの肯定的な価値づけが続けられてきていることがわかった一方で、高学年の方がその割合が低いこともわかった。やり抜く力を育みながら、肯定的な価値づけを十分に行っていく教育実践をしていくことも重要である。

4 今後の展開

タブレット等の ICT 機器を活用した授業が増えたことで、児童が主体的に学習に取り組む姿が多く見られ、授業の幅も広がってきた。しかし、今後も主体的かつ協働的な学びを実現するためには、どのような場面で ICT を活用するのが望ましいのか、学年に応じた適切な活用方法を研究する必要がある。さらに、来年度は今年以上に教科や領域を絞り、より具体的な焦点を設定した研究の進め方を検討していきたい。